幼 稚 園

平 成 4 年 度

教育研究員研究報告書

幼 稚 園

東京都教育委員会

平成４年度

教育研究員名簿

主題	部会主題	区市名	幼稚園名	氏名
幼児が主体的に生活していくための指導の在り方	１部会 感じたことをのびのびと表現する力を養うために	千代田	麹町	村上敏江
		新宿	東戸山	渡辺文子
		江東	かもめ	堀松江
		品川	御殿山	△佐野良江
		目黒	みどりがおか	△丸山光子
		世田谷	砧	中田ひろみ
		杉並	成田西	渡辺恵里
		江戸川	鹿本	◎伊藤範子
	２部会 自らつまずきを乗り越えていく幼児を育てる援助の在り方	中央	月島第一	□夏目篤子
		港	白金台	唐沢はるみ
		新宿	落合第六	池田美知子
		文京	青柳	荒木尚子
		台東	済美	井口厚子
		江東	香取	五十嵐矩子
		荒川	町屋	山田直子
		板橋	高島	荘司紀子
		府中	みどり	田島永美子

◎世話人　□副世話人　△記録

担当課長	小島　宏	教育庁指導部初等教育指導課
担当指導主事	橋本誠司	教育庁指導部初等教育指導課
担当指導主事	塩　美佐枝	教育庁指導部初等教育指導課
担当指導主事	岡上直子	教育庁指導部初等教育指導課

目　　次

研究に当たって …… 2

＜第１部会　感じたことをのびのびと表現する力を養うために＞

Ⅰ　主題設定の理由 …… 3

Ⅱ　研究方法 …… 3

Ⅲ　研究内容 …… 4

１．幼児の表現について …… 4

２．表現する力について …… 4

３．幼児の表現の特徴やよさを生かす指導 …… 6

４．実践事例 …… 7

(1)　ことばによる表現は活発に見られるが，単発的な内容の多いＫ児の事例…… 7

(2)　友達とのかかわりの中で，自分の気持ちを伝えにくいＡ児の事例 …… 10

Ⅳ　まとめと今後の課題 …… 13

＜第２部会　自らつまずきを乗り越えていく幼児を育てる援助の在り方＞

Ⅰ　主題設定の理由 …… 14

Ⅱ　研究方法 …… 14

Ⅲ　研究内容 …… 15

１．つまずきとは …… 15

２．教師の幼児の見方をとらえる …… 16

３．事例から指導の在り方を考える …… 20

(1)　教師とのかかわりを求めているＮ児の事例 …… 20

(2)　友達とのかかわりを求めているＳ児の事例 …… 21

(3)　友達の気持ちを分かろうとしているＭ児の事例 …… 22

(4)　指導の在り方 …… 23

Ⅳ　まとめと今後の課題 …… 24

研究に当たって

幼児は現在，都市化，情報化，国際化等と著しく変化している毎日の中で生活している。今後，さらにこの傾向は強くなってくると思われる。めまぐるしく移り変わるこれからの社会を生きていくためには，一人一人が自分で考え，判断する力を身に付けるなどして，主体的に生活していくことが大切である。

幼児期は生涯学習の基礎づくりとして，特に重要な時期である。したがって幼稚園生活の中では自分で考え，行動する態度を身に付けるとともに豊かな心やたくましさをもち，自ら生活を展開していく幼児を育成することが必要であると考えた。

また，今年度は指導の在り方に焦点をあて，幼児が主体的に生活を展開して，生き生きと充実した生活がおくれるようになるためにはどのような指導をしていったらよいかについて具体的な指導の方法を探っていきたいと考え，「幼児が主体的に生活していくための指導の在り方」と主題を設定して研究を進めることにした。研究に当たっては「感じたことをのびのびと表現する力を養うために」と，「自らつまずきを乗り越えていく幼児を育てる援助の在り方」の二つの部会を構成した。主な研究内容は次の通りである。

第１部会 —— 感じたことをのびのびと表現する力を養うために ——

幼児が主体的に生活していくためには，一人一人が自分の思いや感じたことを，のびのびと表現する力を養い，自己実現したり，楽しかった経験を積み重ねることが大切である。

幼児が様々に表現している姿から，表現する力について探り，教師の援助の在り方を研究することにした。そこで，表現する力について視点をもって見ることで，指導の手だてをみいだし，幼児が十分に自己を発揮して生活できるようになるための指導法について探った。

第２部会 —— 自らつまずきを乗り越えていく幼児を育てる援助の在り方 ——

幼児がのびのびと自分を表し，主体的に生活を展開していくためには，教師によって発達に応じた環境が保障されていることが必要である。幼児が遊びの中でつまずき，乗り越えることが困難な状態でいる時，教師は幼児をどのように受け止め，どのように援助をしていくと幼児の発達が促されるのか。教師一人一人の考え方をアンケートや面接調査で探るとともに，一場面での対象児の行動分析を行いつまずきの原因を明らかにし，援助の在り方を探った。

幼児が主体的に生活していくための指導の在り方
―― 感じたことをのびのびと表現する力を養うために ――

Ⅰ　主題設定の理由

幼児を取り巻く生活環境は大きく変容し，それに伴い生活経験が多様に変化してきている。幼児の遊びの中にテレビやボタンの操作をして遊ぶゲームなど，工夫の余地のない遊びが大きな位置を占めたり，少子化傾向による過干渉が増えたりして，受身の生活が多く幼児が自分から表現する必要が少なくなってきている。しかし，これからの生活をより豊かに過ごしていくためには自分の思いを表現したり，人の思いを受け止めたりしながら人とのかかわりをもち，個性を発揮して生活していくことが大切になってくると思われる。

幼児が自分の思いをのびのびと表現している様子を見てみると，表情が生き生きとし，次々と遊びの目あてをもったり，イメージをふくらませたりして遊びを楽しんでいくことが多い。そして，主体的に生活していくことは，このような個々の遊びが充実したり楽しかった体験を積み重ねていくことである。したがって，心身の発達が著しく，人間性の素地が養われる幼児期こそ，豊かな体験をすることで表現する力を育て，自分なりの感じ方を自分らしい表し方で，のびのびと表現することの喜びや楽しさを味わわせていくことが大切である。

幼児は本来，感じたことや考えたことを表現したい欲求をもち，内面にある思いやイメージを言葉や動きで表したり，相手に伝えようとしたりしている。しかし，私たちは幼児がその幼児なりの方法で表現していることを十分に読み取ることができなかったり，見落としたりしているのではないだろうか。このような指導の反省をもとに，幼児の表現する力を支えているものは何か，その視点をとらえ，さらに，幼児が感じたことをのびのびと表現し，十分に自己を発揮して生活できるようになるためには，どのような指導が必要なのかを探っていきたいと考え，主題を設定した。

Ⅱ　研究方法

1．幼児の行動の記録から，幼児の表現する力のとらえ方を探る。

2．感じたことをのびのびと表現する力を養うための指導の在り方について考える。

○観察対象児の表現する力の特徴をとらえ，そのよさを生かす指導の方針をとらえる。

○指導の方針をもとに実践し，指導の在り方について考える。

Ⅲ 研究内容

1．幼児の表現について

表現とは，幼児の心の内にあるものを動きや言葉などにより，人に伝える働きである。幼児は，毎日の生活の中で，美しいもの，不思議なこと，驚きなどの感動的な出来事に出会い，自分の思ったこと，感じたことや様々に体験したことを表現している。また，心を揺り動かされたときには，思わず歓声をあげたり，手足が動いたり，表情が変わったりするなど，表出することがある。本研究では，表出も，その幼児なりの心の動きを表しているのではないかと考え，表現としてとらえた。

2．表現する力について

幼児の遊びや生活を見ていると，様々な方法で表現していることが分かる。その表現の仕方は，幼児一人一人違い，それぞれのよさや持ち味をもっている。この表現する力をとらえるには，どのような視点をもてばよいかを探るために，幼児の行動記録から考えてみることにする。

＜M児がD児たちと基地作りをする場面＞　　4歳児　6月

幼児の言葉と動き	何を感じているか	表現の内容・方法など	
①ブロックで作った物を見せて，「これ，飛行機になったの」と言う。D児は，じっと聞いている。	・教師に自分の作った物を見せたい。　・認めてもらいたい。	・作った物を認めてもらいたい気持ちを言葉や動きで出す。	提示する 伝える イメージ
②「これ飛行機の基地！」と言って枠積み木の中へブロックの飛行機が入る基地を作ろうとする。	・飛行機が入る基地にしたい。	・自分のイメージを出して，枠積み木で基地を作る。	イメージ 実現する
③M児の様子をじっと見ていたD児と一緒に大きな枠積み木を持ってきて，飛行機が入るような基地を再度作る。	・自分のイメージを受け入れてくれる友達がいて嬉しい。 ・飛行機が入る基	・友達と一緒に，自分のイメージした基地を作る。 ・別の方法を考え再度作る。	イメージ 仲間意識 満足感 工夫

	地にしたい。		
④積み木を運び，基地の後ろに並べたり，積んだりする。 D児「これなんだ？」 M児「操縦するやつだ」と言いながら，何回も積み木を運ぶ。 D児も一緒に作る。	・操縦席を作って，もっと飛行機らしくしたい。 ・一緒に遊ぶ友達が側にいて嬉しい。	・友達の問いかけに耳を傾ける。 ・考えたことを実行する。・イメージしたものに合った物を捜す。	実現する イメージ 捜す 仲間意識

＜考察＞

上記の表の①では，M児は，自分が作った物を飛行機に見立てている。自分がブロックにかかわりそこから刺激を感じ取って見立てているのであり，「感性」が働いていると考える。また，作った物を認めて貰いたい気持ちを言葉で「話し」，提示すると言う「動き」で表現している。このとき，D児は，じっとM児の話を「聞く」ことで自分の興味やM児と遊びたい気持ちを表現している。

②では，M児は，自分の遊びのイメージを表現している。イメージをもち，それを工夫したり実現したりすることは，「創造性」とかかわっていると考える。

③では，M児は，自分のイメージを受け入れてくれる友達の存在に喜びや満足感を感じ，それが実現への「意欲」につながり，工夫をしている。D児はM児の様子をじっと見て，その後にM児と一緒に基地を作り始めている。D児は，M児の様子をじっと「見る」ことで，一緒に遊びたい気持ちを表現していると考えられる。

④では，二人は問いかけたり，自分の考えを言ったりするなど「話す」という方法で表現し，一緒に行動しているのは，友達に対する「信頼感」に基づいていると考える。

以上のような方法で数事例を検討した結果，表現する力について次のように考えた。

「話す」ということは，表現の一つの方法であり，そこには，様々な言葉をつぶやいたり，ささやいたり，強調したりすることも含まれると考える。また，幼児は，活発に体を動かすことで表現したり，ゆっくりとした動作の中にも何かを表現していたりするが，これらは「動く」という方法で表現しているのであり，友達に近付いたり，動きを模倣したりすることも含まれると考える。さらに，友達の動きをじっと見たり，そっと横目で見たり，人の話に耳を傾けたりしているときには，じっと見たり聞いたりするという方法によって一緒に遊びたい気持ちや友達への興味などを表現していると考えたとき，「見る」「聞く」ということも，幼児にとっては表現の方法と考えることができる。

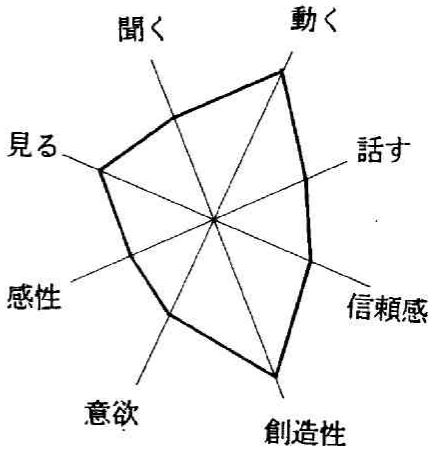
これらの表現の仕方は，幼児の発達の様子や遊びの相手や状況などによって変わってくるが，「感性」「意欲」「創造性」「信頼感」などに支えられており，これらが豊かになることによって，表現の内容や方法も豊かになると考える。そこで，表現する力を，「話す」「動く」「見る」「聞く」「感性」「意欲」「創造性」「信頼感」の８つの視点でみていくことにする。

３．幼児の表現の特徴やよさを生かす指導

(1) 幼児の表現の特徴やよさをとらえる

上記の視点で観察対象児の表現を分析し，検討する中で，一人の対象児の表現の特徴やよさについて研究員の間でも共通理解が難しかった。そこで，研究員一人一人が対象児の表現にどのような印象をもったかを，下図のようなイメージ図として作ることにした。

このイメージ図は，各視点について，表現の出現頻度，内容や質などを総合的にとらえて，豊かと思われる場合に外側に点を取るものである。これは，対象児を観察し，行動記録を分析した後に行うものであるが，観察者の印象であり，客観的な尺度ではない。そこで，一人の対象児について，担任や観察者がイメージ図を作ってみるとずれが生じる。このずれの原因を検討することによって，対象児を多面的にとらえることになり，対象児の表現の特徴やよさに対する理解が深まると考える。



イメージ図の例

(2) 幼児の表現の特徴やよさを生かす指導の方針について

観察者は，対象児が何を感じ，何を表現しようとしているのか，内面を理解してから８つの視点で幼児の表現する力をとらえるが，上の図の例では，創造性が豊かで，動きで表現していることが多いという印象でとらえている。それらが，対象児の表現の特徴でありよさであるととらえられたときに，そのよさを生かし，さらに伸ばしていくように幼児にかかわり援助していくことによって，対象児の個性が生かされると考える。幼児は自分なりに表現したことが生かされると実感したとき，表現の喜びを感じ，さらに表現しようとする意欲につながる。そこで，対象児の表現の特徴やよさを生かすには，毎日の生活の中で，教師はどのようなかかわり方をすればよいかを考え，それを指導の方針とする。

この指導の方針は，対象児とのかかわり方の方針であり，具体的な場面でどのような言

葉かけや援助をするかは，それぞれの場面の状況や幼児の発達の状況を考慮し，対象児や周囲の幼児にとって必要な体験となるように配慮して行うものである。こうして教師が，日常の生活の中で意図をもってかかわる事例から指導の在り方を考察する。

4．実践事例

(1) ことばによる表現は活発に見られるが，単発的な内容の多いK児の事例

2年保育　5歳児　9月初旬

―― K児・Y児・T児の3人が折紙のカメラを使って遊んでいる場面 ――

・Y児に作ったカメラを持っていき渡す。　動く・満足感を味わう

・Y児が「違うよ」と言って直す手元をのぞきこむ。　見る・関心をもつ

・記録者にカメラを向ける。　動く・安心感をもつ

・「パチン」といってシャッターを押す。　話す・意味付ける

・カメラが開くのを見て「あくからいいな」と　話す・気付く

Y児の顔を見ながら言う。　話す・仲間意識

（「その写真いつできるの？」と記録者が尋ねる）

・記録者の顔を見ながら「一年後」と答える。　話す・イメージ

・積み木の家に行き「ここは，カメラマンの家な」とY児に言う。

話す・イメージ

・コーナーを指さして「ここにカメラを入れとこう」と言って置く。

話す・発想をつぶやく

（Y児・T児，黙ったまま同じように置く）

・保育室をひとまわりし，積み木に戻る。　動く・関心をもつ

・「おい，おまえカメラ持ってるか？　カメラ持ってるやつだけだよ」

と言ってカメラを持つ。　話す・仲間意識

・カメラを持ったY児・T児と一緒に記録者を写す。　動く・関心をもつ

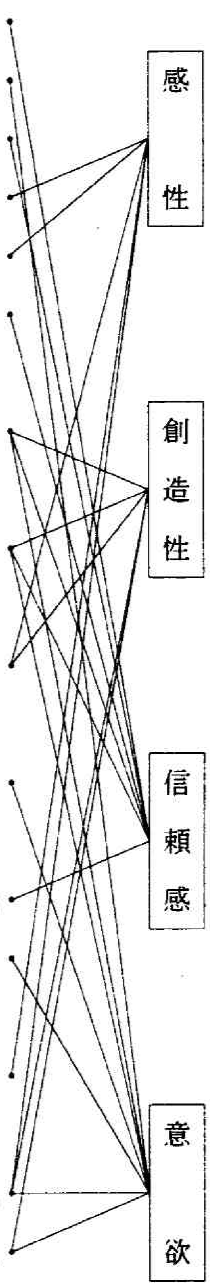
（「写真ほしいな」と記録者が言う）

・「これはカメラに写るだけなの」と言う。　話す・説明する

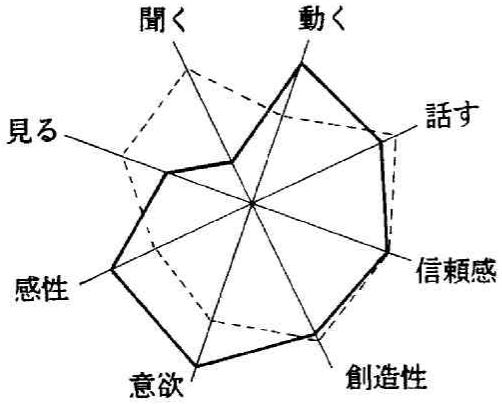
（「私も見たいな」と記録者が言う）

・積み木の家を出て，製作コーナーへ行き，描く。　動く・対応する・発想

・にこにこして戻り，「今度出てくるよ」と絵を見せる。動く・自信・実現



＜K児の表現の特徴やよさについて＞



—— 観察者　……担　任

—— K児のイメージ図 ——

事例の記録を整理し，K児の表現についてイメージ図を作ってみると，見る，聞くについて記録者と担任とでは印象が違っていた。このずれについて話し合ってみると，担任はK児について日常の生活の様子から，「聞かれたことに答えるとき，自分の思いを通そうとするときなどは，相手に分かるように話そうとする。言葉遣いや内容が的確で状況に対応することができる。誰とでも一緒に遊ぶことができ，けんかになるようなことはないなど，言葉遣いや人に接する態度がきちんとした幼児だが，自分の興味を追求する姿勢に欠ける面がある。」という受け止めをしていた。しかし，観察者はK児について，「遊びの中で話すことは多いものの，その内容は発想が単発的で遊びの中で生かされにくい」と感じていた。この検討により，K児は，聞かれたことには筋道を立てて話すことはよくするというよさがあり，遊びの中ではそのよさが生かされにくいことが分かった。担任は，K児の穏やかさや優しさ，誰からも声をかけられ遊びに誘われている姿などに安心し，K児の気持ちの表現の仕方や内容について見過ごしていることが多かったと反省している。

＜指導の方針＞

K児にとっては，友達と互いのイメージを出し合いながら考えたり，工夫したりして遊びを作っていく体験をすることが表現する力を育てることにつながると考え，次のように指導の方針をとらえた。

K児が言葉で表現した考えや思いを，遊びや生活の中で教師が話題にしたり，実現できるように援助することによって

ア．教師に対する信頼感が感じられるようにする。

イ．友達にも認められながら，自分の思いが達成された満足感が味わえるようにする。

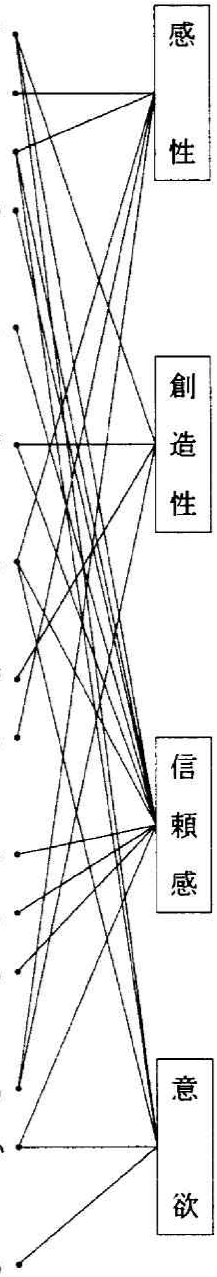
このような手だてによって，K児が身に付けてきた表現する力が生かされ，友達との伝え合いや共感ができ，遊びも充実し，信頼感が深まると考える。

＜指導の方針に基づいたかかわり方を継続的に行った後の記録＞

―― T児とN児と３人で積み木の家を出たり入ったりしている場面 ――

積み木の家を中心とした遊び　　９月下旬

・「みてみて，ここ入り口」（N児が入る）　話す・イメージ
・「しめるよ」と言って積み木を動かす。　動く・見立てる
・自分も中に入り，少しして出てくる。　動く・模倣する
・T児の動きを見「落ちてもしらないよ」と言う。見る・話す・関心をもつ
（T児「いいもん」「上からも入れるんだよな」）
・「うん」と答える。　聞く・受け入れる
・「犬小屋，ここ入りな」「あけてあるよ」とN児に言う。
話す・説明・イメージ
（T児「遊びに行こうっと」とY児の家に行く）
・T児の言葉をにこにこしながら聞き，ついて行く　動く・模倣する
（T児が「モルモット」と言いながら出てくる）
・「オレ，ねずみ　同じ種類」と言う。　話す・イメージ
・よつんばいになって「ちゅうちゅう」言いながら歩く。話す・意味付ける
（T児　Y児たちが犬小屋に入る）
・「こんなに入ったの」「もうまんぱい」と言う。　話す・説明する
・N児ブロックを持ってくるのを見て「もうえさいらない」　話す・伝える
・T児におんぶしたりからみついたりする。　動く・触れる
・犬小屋の隣の自分の家に入り紙筒を耳にあてた後に「はい……」と言って紙筒を置いて出ていく。　動く・発想する・見立てる
（S児「皆さん，お待たせいたしました」と広告紙をおく）　見る・関心
（I児がその紙を一枚とって丸める）
・一枚持って製作コーナーに行く。　動く・模倣する



＜考察＞

９月下旬の事例では，次のようなことが言える。

・友達の言葉を気にしたり，受け入れたりして自分から動こうとしている。

相手に対応して自分の気持ちを伝えようとする表現が見られるようになってきた。このときのK児の表情には相手に対する信頼感が感じられる。

・友達との会話の中で，イメージがふくらんでいる。

自分が見立てたことを相手に伝えたり，友達のイメージから新たに自分のイメージをもったりするなど，友達とのやりとりをする中に，K児のもっていた感性や創造性が発揮されてのびのびと表現していると感じられる。

・自分の遊びの場以外の友達の言動にも関心を向け，受け止めている。

他の遊びをしている幼児の提案を受け入れながら，自分の遊びを続ける意欲が感じられる。

以上のように，K児の表現に少しずつではあるが変容が見られるようになった。この変容までの間，指導の方針に基づいてK児に接してきた。その一例をあげると次のようである。

運動会の種目を決めるとき，鈴割りと綱引きのどちらをするか，学級全体での話合いが二分した。このとき，教師は，K児の「綱引きをやってから鈴割りをやったらどう？」という言葉を取り上げた。すると，他の幼児からもその方法についていろいろな考えが出され，K児にとっては，自分の考えが教師や皆に認められたと実感する体験となった。

このようにK児の表現したことを皆の前で取り上げた教師の姿勢が，K児との信頼関係を深め，友達に認められる体験が人への信頼感へつながり，遊びの中でも自分の気持ちを安心して表せるようになっていったと考える。

また，一つの目的に向かって自分の考えを言ったり，友達の考えを受け入れたりしながら思いを実現していく喜びや満足感を味わうことができたのではないかと考える。

K児の筋道を立てて話すというよさが，自分だけが分かったものの言い方をするように聞こえて，友達に快く受け入れて貰えないことが多かった。しかし，友達との遊びの中でもK児の言葉を取り上げたり，意味付けて相手にK児の意図が伝わるようにするなど，遊びの中で生かされて行くように配慮したことで，K児自身が遊びをじっくりと楽しむようになってきた。また，K児が感じたことをそのまま素直に表現するようになり，友達にもそれが受け入れられることが多くなった。こうしたことが，友達と互いのイメージを出し合いながら考えたり，工夫したりして遊びを楽しむ姿につながったと考える。

(2) 友達とのかかわりの中で，自分の気持ちを伝えにくいA児の事例

3年保育5歳児

― J児・Y児の働きかけに応じながら自分なりの表現を楽しんでいる場面 ―

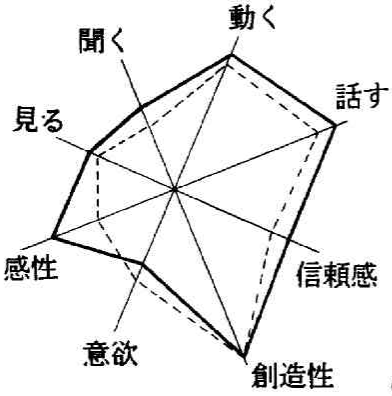
9月初旬

（J児が「Aちゃん，こっち向いて」とカメラを持ち，A児に声をかける。）

・ウサギの人形を両手で持ち，カメラの方を向く。　動く・反応する
・「写真ちょうだい」　話す・伝える
・「おみおつけだ，おみおつけだ，おみおつけだ」と言いながら自分の居た場所に戻る。　話す・つぶやく
・J児のカメラにポーズをする。　動く・反応する
・撮ってもらって喜ぶ。　動く・表情
・「おいしいな，おいしいな，おいしいな」とウサギの人形を動かしながら言う。　話す・なりきってつぶやく
・「おなかいっぱいのとき，こういうしるしなのね。」とウサギの人形の耳をクロスに合わせる。　話す・イメージ
・「眠い」と家の中に入る。　動く・なりきる
（Y児がA児にスカートを持ってくる。）
・「はい」と言ってはく。　動く・反応する
・引き出しの中の他のスカートを取り出して見る。　見る・捜す
・はいていたスカートを脱ぐ。
・S児がはいているのを見て取り替える。　動く・思いを実現する
・スカートの脇をつまんで回り，　動く・なりきる
・「バレーリーナみたい」と言う。　話す・意味付ける

感性
創造性
信頼感
意欲

＜A児の表現の特徴やよさについて＞



— A児のイメージ図 —

観察者（実線）と担任（点線）のイメージ図から考えると，動く，話すなどでは自分のイメージを表現しているが，意欲や信頼感が弱いと感じられた。このことを検討してみると，担任は「A児は，全体の場では黙っていることが多いが，特定の友達には，自分のイメージを表現して楽しめるよさがある。また，他のことに興味があっても，特定の友達に声をかけられるとその友達の要求に応じようとするなど，自分のしたいと思ったことを実現する意欲が弱い」と感じていた。観察者は，「遊びの中では自分のイメージを積極的に表現するよさがあるが，つぶやきの形が多くA児の創造性が友達の中に生かされにくい」と感じていた。

＜指導の方針＞

内面にある創造性が友達にも認められるものとして生かされ，より豊かになるとともに，学級の中でA児のが，友達関係を広げていくことにつながっていくようにと考え指導の方針をとらえた。

①いろいろな友達関係の中で，発想や動きを認めることによって，自分自身に自信がもてるようにするとともに，まわりの幼児にもA児の存在が感じられるようにする。

②自分の考えを表す機会を設け，教師が見守っているということを知らせることによって，自分の思いや考えを，言葉に出すことに安心感がもてるようにする。

＜指導の方針に基づいたかかわり方を継続的に行った後の記録＞

― Y児，Z児らと一緒に遊びながら自分の思いを相手に表わしている場面 ――――――

縫いぐるみの人形の家ごっこ　　9月下旬

・縫いぐるみの人形を持ち「名前なんて言うの」と言う。　話す・つぶやく

・ダンボールの中のタオルに人形の頭をもぐらせて動かす。動く・イメージ

・「何かあったかな」（Y児，Z児がこれを見て笑う。）　話す・つぶやく

・「熱い！きゃー」と人形を出し，笑って二人に向ける。話す・意味付ける

・R児，Z児が「お熱出ちゃったのね」「私も」と話している方を見る。　見る・気付く

・二人のとなりに人形を寝かせ布団をかける。　動く・模倣する

・「こうい　時は，温かい○○」とR子に言う。　話す・伝える

（R児，違うでしょ，こういう時は温かい紅茶でしょ」と言う。）

・「そうじゃないよ，温かい焼酎だよ」と二人で笑い合う。話す・対応する

・「ねぇ，マラソンしなきゃだめだよ」と大きい声で言う。　話す・伝える

・「マラソンだぁ」と人形を持って走る。　話す・伝える・強調する

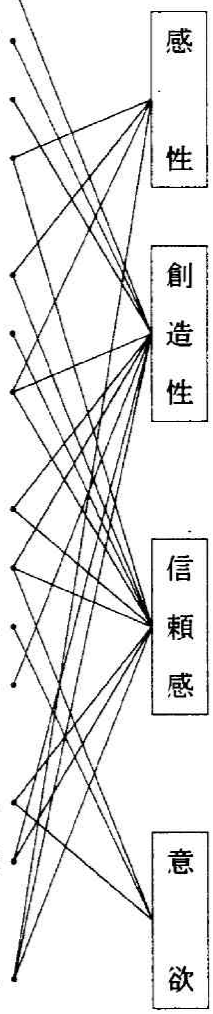
・Z児に貰ったスカートを人形に着せ突然泣きまねをする。動く・強調する

・「マラソンに行かなきゃ」（その声を聞き三人は出かける。）

・「私，一番のり！」とあわてて後を追う。　話す・強調する

・「寝ようか夜だもん」とR児の目を見て言う。話す・伝える，見る・同意

・粘土で御飯を作り，「これで用意は決まったよ」と茶碗に粘土の御飯を入れる。　話す・見立てる



＜考察＞

教師の意図的なかかわりの後の事例では，自分が表現したイメージを相手が受けてくれたこともあって，自分の思いが伝わるまで話す，共感し合うなど，表現の質に変容がみられた。

この変容までの間，教師は意図的なかかわりで，A児がバレリーナの表現を喜んでいたことを認め，運動会でその動きを生かすようにしていった。その中でA児は，皆の前で踊ってみせたり，「カルメンってこんなふうにするよ」と，花を口にくわえたりするなど，今までは自分の中だけで楽しんでいたものを相手に伝えようとするようになった。

これは，教師が見守っている安心感が，A児の表現意欲を高め，友達とのかかわりの中でもA児のイメージや考えが理解され，そのよさが友達に伝わったためと考えられる。

Ⅲ まとめと今後の課題

幼児の表現する力の特徴やよさをとらえ，そのよさを生かす指導の方針をとらえて実践することによって，次のようなことが分かった。

1．視点をもって，多面的に表現する力をとらえることが大切である。

複数の教師が視点をもって幼児の表現の特徴やよさをとらえ，検討することによって多面的に理解し，幼児の表現する力の実情に近付く理解ができたと考える。しかし，表現する力は，遊びや相手によって発揮のされ方が違うので，固定的にとらえず，様々な場面で，繰り返しとらえていくことが，幼児をより深く理解することにつながると考える。

2．表現する力を養うには，幼児の特徴やよさを生かす指導を工夫することが大切である。

二つの事例は，具体的な場面や援助の言葉は違うが，その幼児なりの特徴やよさを伸ばし，友達のいる場で認めてその幼児が存在感を感じられるようにしたものであり，幼児の表現する喜びや満足感となり，さらに表現する意欲につながった。

幼児の内面にあるイメージや気持ちを言葉や動きですべて引き出すことが目的ではないが，表現する喜びを体験できるようにしたいと考える。そこで，のびのびと表現する力を育成するためには，一人一人の特徴やよさを的確に理解するとともに，それが遊びや友達の中で生かされていると幼児自身が実感し自己の存在感を感じるように，一人一人に応じた具体的な援助の方法を工夫することが大切である。

今回は二事例のみを取り上げているが，一人一人の特徴やよさを生かし，さらにその特徴やよさを伸ばす指導ができるように，表現する力の視点やイメージ図の検討方法などを吟味することが，今後の課題である。

幼児が主体的に生活していくための指導の在り方
―― 自らつまずきを乗り越えていく幼児を育てる援助の在り方 ――

Ⅰ　主題設定の理由

主体的に生活する幼児の姿とは，幼稚園生活において自ら環境にかかわり，目的をもち，生き生きと生活し，自己実現を図っている姿である。幼児が主体的に生活していくためには，幼児一人一人がのびのびと自分を表し，楽しく意欲的に園生活を送れるよう，一人一人の幼児の理解を深め，発達に即した指導を行う必要がある。

園生活の中での幼児の姿を見ると，様々なことが原因となって自分がしたいことができなかったり，遊びが楽しめず，自己実現が図れずにいる幼児がいることもある。時には登園を嫌がったり，遊びに取り組めなかったりして，楽しい日々が送れない状態になることもある。

また，それ程はっきりとは幼児が意識しなくても，その幼児の望ましい発達を考えるとき，乗り越えなければならないと感じられる発達上の課題がみられるときもある。こうした幼児の様々なつまずきは，幼児自身が自力で乗り越えていくことが大切であると思われるが，そのために教師はどのような援助を行えばよいのであろうか。

自らつまずきを乗り越え幼児が主体的に園生活に取り組むためには，教師一人一人の幼児理解や受け止め方，援助の在り方が解決に向う重要な鍵になるのではないかと考える。

本研究では，幼児のつまずきと，つまずきを乗り越えていく過程をとらえ，教師が幼児をどのように理解し，どのような指導が必要かを探っていきたいと考えた。

Ⅱ　研究方法

1．研究主題について共通理解をする。

　　つまずきとは何かについて先行研究を行う。

2．個々の教師の「幼児のつまずき」のとらえ方，援助の考え方を探る。

・アンケート調査を行い，分析・考察する。

・ビデオ撮影した幼児の姿を視聴後，面接調査し分析・考察する。

3．指導事例により，幼児のつまずきの援助の在り方を探る。

・研究保育を行う。

・指導事例をもち寄り検討する。

Ⅲ 研究内容

1．つまずきとは

日常の保育の中で，幼児はいろいろな行動を起こす。にこにこと友達と言葉をかわしながら遊ぶ姿，一人でできたと喜ぶ顔，分からないと泣きだしてしまう幼児，等々，教師は毎日様々な幼児の様子を目の前にしながら生活をしている。次に事例を通して“つまずき”について考察する。

例えば①

4歳児K児は，登園後，友達が次々に椅子を出してプールの着替えを始めているのを見ている。教師は「椅子を持ってきて着替えてね。」と皆に聞こえるように声をかけている。K児は「どうしたらいいの。」と泣きそうな表情で言う。もう一度，教師は「椅子を持ってきて着替えてね。」と話すが，べそをかいている。「どうしたの。」と教師が落ち着かせようとすると「どうするの。」とK児は怒鳴る。「皆はどうしてる？」「着替えてる。」「そうねK君も同じにすればいいのよ。」「分からない。」と心細そうにしていたが，しばらく友達の様子を見ていて，椅子を取りに行き，着替え始める。

この場合，K児はどうしたらいいのか困って，泣きそうになり，怒鳴ったりしている。この行動がつまずいていることを表しているサインではないだろうか。なんとかしなくちゃという思いで，自分の感じている嫌な気持ちを何らかの行動で示しているのである。このK児のどうしたらよいか分からないという状況が「つまずき」であると考えた。この事例の教師は，K児が落ち着いて考えて行動できるように援助しているが，教師に励まされたK児は自分で椅子を取り，着替えをすることができ，つまずきを自分で乗り越えることができた。そしてK児は「一人で着替えができた。」という快感情を味わうことができたと思われる。

例えば②

5歳児のM児はいつも自分の思い通りに遊び，遊びの途中で抜けることもしばしばである。ところがある日，縁日ごっこの綿菓子を作っていると一緒に遊んでいたT児が隣の魚釣りに黙って行ってしまった。「先生T君がすぐに行っちゃう。」と訴えるので，教師は二人で話すように促す。「T君，何も言わずに行ったらぼく一人になっちゃうよ。」「ぼく，魚釣りがやりたいんだもん。」はっきりとT児に断わられて「ああ，一人でやるのか，誰か入ってくれないかなぁ。」とつぶやく。次の日，綿菓子屋にS児が入ってきた。M児は喜んだが，しばらくすると黙って抜けていった。S児は「Mちゃんはすぐに遊びに行っちゃうんだから，ずるいよ。」と怒りながら，一人で綿菓子を作り続ける。

この場合のつまずきは，M児が勝手に遊びから抜けてしまうことである。M児はそのことの問題点について自分では気付いていないが，教師は，M児の発達を考えるとこのことをつまずきととらえ，その状態を解消していく必要があると意識している。

＜つまずきとは＞

このようにつまずきとは，自分の思いや欲求が分かってもらえない等と，不快感情を抱いた時に現われるすっきりしない状態や，本人が不快感情や不自由を感じなくても，周りの友達などに，不快感を与えたり，迷惑をかけたりしている状況を作ってしまっていることである。さらに，つまずきには，①のように本人が意識している場合と，②のように本人が気付いていないが，つまずきであると教師がとらえられるものとがあるのではないかと考えた。本人が気付かずに，その子の発達上必要な課題を超えずに過ぎていってしまうと，やがては大きな壁にぶつかってしまうことがある。発達上通らなければならない道筋を通過しないことが，本人が気付いていないつまずきではないかと思われる。

＜つまずきのサインと指導＞

幼児はつまずきを様々な行動で表わす。それは，今，満たしたい欲求があるということを知らせたり，越えなければならない自己の課題を目前にしていることを伝えるサインとも言えるであろう。そのサインを感じとり，幼児が自力でつまずきを乗り越えていけるように援助していくことが大切である。

しかし，この幼児のつまずきのサインの受け止め方は，教師の幼児理解，価値観に影響され違いが生じるように思われる。そこで，アンケート調査やＶＴＲを利用して，教師が幼児の姿をどのように感じているかを把握することにした。

2．教師の幼児の見方をとらえる

私達は，日頃幼児の話をするが，同じ幼児のことでも，教師によってその見方や教師自身の価値観によってとらえ方の違いを感じることがある。そこで，教師が幼児のつまずきをどのようにとらえているのか，また援助の在り方について，アンケート調査と，ビデオ視聴による面接調査を行い，教師の実態を知りたいと考えた。

(1) ビデオによる面接調査について

２年保育５歳児の男児の６月下旬の姿（友達とドッヂボールをしている）を５分間ビデオに撮ったものを，36人の先生方（経験年数が１～６年が７人，７～12年が４人，13～18年が９人，19年以上が６人，担任外が７人，小学校の担任が３人）に見てもらい，次のような質

問に面接で答えてもらった。

ア．ビデオを見た後，その幼児に対してどのような感じを受けたか。

イ．この質問の後，担任のとらえている幼児の実態について知らせ，この幼児に対して，見方が変わったかどうか。

ウ．担任のとらえている実態と合わせ，この幼児に対して，今後どのような援助が必要と思われたか。

＜面接調査の結果＞

・アの質問に対しては，36人中１人だけが「気にならない」と答えているように画面の幼児の姿からほとんどの教師が，「気になること」を感じている。特に友達関係，能力的なことに目を向けている受け止め方が多かった。しかしその内容を見ると○つまずいている，気になるなど問題と感じている見方と○自分の世界をもっている・自分なりに動いている等，問題と感じていない見方とがあり，同じような言い回しでも微妙にニュアンスが違う。

・イの質問については，担任がとらえた実態と画面から受ける印象は，変わらない教師が，ほとんどであった。

・ウについては，アに対応した回答からか，個別指導，存在感，友達とのかかわりの必要感が多かった。また経験年数の浅い先生や４歳児の担任は，教師がじっくりとその幼児にかかわっていく大切さを指摘し，経験年数が増える程答えの幅も広がっていた。また幼稚園の教師が内面的な部分を大切にする援助が多いのに比べ，小学校の先生は外側から具体的，直接的な指導（ルールの工夫，指示の言葉についてなど）を大切にする援助が多かった。

また，対象児を理解力の不足と見るか，本人のテンポが集団のテンポに合わないだけと見るかで，指導の内容が違ってくる。特に援助の面では，本人の育っていない面を個別に指導していく方法と，本人のよさ（浸り込む世界をもつことをよい面と見る）を教師も一緒に楽しむようなかかわり方が必要だという考え方があり，客観的に幼児をとらえる目と，その子らしさを大切にする見方の，どちらも大切な援助の観点であるということが，浮きぼりになった。

このように，ビデオで同じ幼児の姿を見ても，教師により幼児の受け止め方に違いが見られ，それにより援助の方法も変わってくる。

教師は常に，自己の幼児理解のみにとどまらず，多様な幼児の見方を学び，援助の方法を深めていくことが大切である。

(2) アンケート調査から

日常の保育の中で，教師が幼児のどのような姿を気にかけているか，その幼児にどのような援助をしているかについてアンケート調査を実施した。

1．現在，クラスの中で，次にあげるような様子で気になる幼児がいますか。一人の幼児について，お答えください。
○印はいくつ付けてもかまいません。

ツ　なんとなくフラフラしている	7％
チ　遊びが長続きしない	6
ヌ　身の回りの始末などの行動が遅い	6
ハ　自分勝手な行動が目立つ	5
ウ　一人でいることが多い	5
ス　初めて経験することに不安な表情をみせる	5
カ　乱暴な行動が目立つ	4
セ　言葉が乱暴になったり友達に命令することが多い	4
ア　少しのことですぐ泣く	4
イ　笑顔が少ない	4
フ　困ったことを伝えられない	4
ホ　その他	4
タ　教師の側にいることが多い	4
テ　「分かんない」「どっちでもいい」とはっきりしない	4
ナ　どこかが痛いとすぐ言う	3
キ　はっきりしない話し方をする	3
オ　些細なことにこだわり教師に訴える	3
コ　お弁当を残したりぐずぐず食べたりする	3
ソ　用具や道具の扱いがうまくいかない	3
ト　教師の視線を気にする	3
ノ　「できない」「先生やって」ということが多い	3
エ　職員室に行くことが多い	2
ネ　登園をぐずる	2
ヘ　「疲れた」と言ったり寝転がったりすることが目立つ	2
ニ　口数が少なくなる	2
ヒ　教師の目を逃れて遊ぶことが多い	2
ケ　「家へ帰りたい」とよく言う	1
シ　トイレに頻繁に行く	1
サ　指やものをしゃぶることが目立つ	0.5
ク　他のクラスの友達と遊ぶことが急に多くなる	0.5

※アンケート集計の内訳

	男　児	女　児	計
4　才	36	14	50
5　才	28	13	41
計	64	27	91

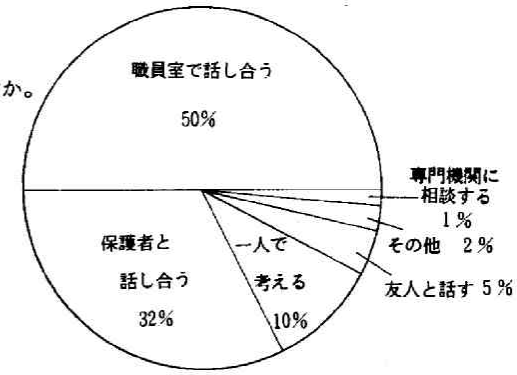
2．その幼児をあなたはどう感じていますか。

ア．とても気になって仕方がない	24％
イ．短期的（一過性）のものだから解決するだろう	1
ウ．あせらず取り組めば心配はいらない	70
エ．本人が解消できる	5

3．幼児のそのような様子は，主にどんな時に見られますか。

ア．登園時	10％
イ．好きな遊びの時	45
ウ．片付け時	7
エ．学級全体の活動の時	16
オ．昼食時	8
カ．降園時	9
キ．その他	5

7．幼児のつまずきを感じ取ったとき，あなたはどう対処していますか。



4．その幼児がこのような行動を起こす原因は何だと思いますか。
考えられるもの全てに○印をつけてください。

カ．親子関係	20%
サ．体験不足	13
オ．友達関係	11
イ．家庭的理由	10
コ．性格	10
ク．教師との関係	9
キ．兄弟関係	7
ウ．基本的な技能の不足	6
エ．基本的な生活習慣が身に付いていないため	6
ケ．言葉の問題	5
ア．心身の疾病やけが	2
シ．その他	1

5．その様子はいつ頃から始まりましたか。

4月	5月	6月	7月	9月	12月	1月	2月
71%	16	7	1	2	1	1	1

9．その子は今のつまずきをいつ頃解消できると思いますか。

オ．まだまだ続く	51%
エ．半年ぐらい	30
ウ．二，三ヵ月	19
イ．一ヵ月以内	0
ア．一週間以内	0

8．現在，どんな援助をこころがけていますか。（複数回答可）

カ．その子の話をよく聞くようにしている	12%
ク．認めたり，励ましたりすることを多くする	12
イ．できるだけスキンシップする	9
サ．その子の気持ちをまわりの友達に伝えたり，まわりの友達の気持ちにも気付かせたりしていく	9
ア．保護者との話し合いを重ね協力を求める	8
タ．様子を見守る	7
ソ．他の先生との話し合いを深め，全職員でかかわる	6
エ．一緒に行動することを多くしている	6
チ．園内研修会や他の研究会等で幼児理解を深める	5
ウ．基本的な生活習慣や技能等，身に付いていないと思われることを，個別に繰り返し指導する	5
ケ．いろいろな遊びを見せたり，誘ったりする	4
シ．教師の手伝いを頼む	3
セ．朝，待っていて迎える	3
コ．身体を動かす経験を多くする	3
オ．クラスの中で話題にしたり，例に名前を出したりする	2
ス．その子にいち早く声をかけたり，知らせたりする	2
キ．勝敗や点数などを気にしなくてよいことを知らせる	2
ト．その他	1
テ．教育相談所等の専門機関に相談する	1
ツ．病院などの治療機関に相談する	0

＜アンケート調査の結果＞

○ほとんどの教師が学級の中に気になる幼児がおり，気になり出した時期の多くは4月である。

○気になる幼児の姿としては「フラフラしている。」「遊びが長続きしない」が多く，項目3の好きな遊び45%に共通している。幼児が自分なりに遊びを楽しんでいるかどうかは教師にとって気になる点になっている。

○その原因が親子関係にあるという教師のとらえ方は問題点を含んでいると思われる。

○指導については，全体的にあせらず取り組めば心配はいらないと感じている。項目8の援助を見ていくと，その幼児を中心に考えた援助が上位を占め，本人との信頼関係を大切に取り組む姿がでている。

また，実際には，そのつまずきを感じ取った時，50%が職員室で話し合い教師自身の問題として考えている姿勢が感じられる。

3．事例から指導の在り方を考える

(1) 教師とのかかわりを求めているN児の事例（4歳児　男児　6月頃）

入園当初は，何回か登園をしぶったことがある。ブロックが大好きで，生活の中では，それをよりどころとしている。何人かの友達とは楽しくかかわって遊んでいるが，苦手なM児に対しては，いやなことをされても「いや」「やめて」と言えないでいる。

N児を中心とした幼児の姿と教師のかかわり	分　　析
D児，M児が紙製作をしている。教師とD児，M児の会話①をきっかけにN児も紙製作を始める。2枚に切り離した紙をT字型につなげて扇ぎながら歩き，近くの実習生②に見せる。さらに紙をつけ足して教師とD児の所に行き，側③で遠慮がちにひらひらさせる。しばらくしてから教師が「N君，何作ったの？」と聞くと恥ずかしそうにこっとし④「たこ」と答える。「どうやって飛ぶの？糸かな？」の問いに「泳ぐよ。海のたこだよ」と元気に言う。教師は苦笑しながら「ごめんなさい。どうする？海に帰す？」と聞くと，側にいたM児とA児が「ここを海にしたら」と提案し海作りになる。N児は困⑤った顔をしながら「たこがこんな所を登ったの」と積み木の上に這わせながらつぶやく。	①教師と友達の紙製作に興味をもつが，その中に入れず一人で始める。 ②③自分の作った物を認めてほしい。 ④教師が自分のたこを見てくれたことによりかかわれたことを喜ぶ。 ⑤M児とA児がN児のたこのイメージを受けて遊び始めるが，N児は海のイメージを受け止めていない。

＜考　察＞

○入園より2か月あまり。自分自身がまだまだ出せず不安のあるN児にとって，教師は一番のよりどころである。教師は幼児の求めている気持ちを感じ取り認め，喜びを共感していくことで信頼関係を育て，幼児がそれを基盤に自信がもてるようにすることが大切である。

○N児の遊びへの思いとD児たちの思いとは，同じ場，同じ環境にあっても内容が違っていた。教師は一人一人の興味，関心に合わせた言葉かけや，その子の気持ちに添った援助をしていくことが大切である。時には教師のかかわりがずれることもあるが，その後の遊びや幼児の動きを見守り幼児の言動を見つめる努力をしていくことで，より深い幼児理解とよりよい援助につながっていくと思われる。

(2) 友達とのかかわりを求めているＳ児の事例（５歳児女児　６月）

Ｓ児は，イメージが豊かで，好きな遊びに集中して遊ぶ。しかし，自己中心的なところがあり，友達と一緒に遊ぼうと誘うが，友達が応じてくれない。教師は，Ｓ児の友達と一緒に遊ぼうとするがうまくいかないこともある姿を受け止め，指導の在り方を探った。

Ｓ児を中心とした幼児の姿と教師のかかわり	分　　析
Ｓ児は，ベランダに描かれている線路で，①一人で「シュシュポッポ」と言って遊んだ後，保育室に入り，アジサイの花作りをしているＫ児とＡ児のところへ行く。②「遊ぼう，早く砂場で遊ぼう」と言いＫ児の手を引っぱる。Ｋ児とＡ児は，関心を示さずおしゃべりして紙を折る。折紙を持ってきて，大きなアジサイの花びらを一つ作って③「ほら」と二人に見せる。二人は関心を示さない。「砂場で遊ぼう」と再度言う。Ｋ児「いやだー」と答える。④「Ｓちゃんと遊ばないとミンキーモモの作り方教えてあげない」と言うと「いいわよねェ，サンタさんに頼むから」とＡ児が言う。⑤二人と口論になる。Ｓ児は，一人で外へ出て行く。⑥すべり台，登り棒，雲梯と次々に遊ぶ。雲梯をしていて，教師が側に来ると，⑦急に元気な表情になり数回やって見せる。「ずっと前４コだったけど５コできた」と言い，教師が「よく頑張ったね」と言うと⑧にこにこ顔をする。	①一人で遊んでいたが，友達と遊びたくなる。 ②砂遊びをしたくてＫ児を誘う。 ③なんとか自分の方に向いてもらいたい。 ④断られても違う方法で誘っている。 ⑤また断わられる。 ⑥口論していやな気分になる。 ⑦気分をまぎらわす。 ⑧教師が側にいて喜ぶ。認められて嬉しい。

＜考　察＞

○Ｓ児は，友達に無視されながらも，自分の意向になんとか添ってくれるよう精一杯の努力をしている。この体験が，次のつまずきを乗り越える精神的な蓄積になると考える。

○努力に対して報われない思いをしているＳ児の気持ちを温かく見守り，理解し，他の場面で励ましたりして心の安定をもたせることも大切である。

○教師がＳ児のよさを見い出し，認めていくことによって学級の中での存在感をもたせていく指導が必要である。

○困ったことに出会った時，解決を急がず，自分の思いを精一杯相手に表現できるようにし，Ｓ児の発達をとらえて援助していくことが大切である。

(3) 友達の気持ちを分かろうとしているM児の事例（5歳児男児　9月頃）

M児は，活発で行動力がある。自分の考えを実現するために遊びに必要なものを準備したり友達へも働きかけたりしていく。しかし，遊びの内容を見ていくと自分の思い通りに進めたり，遊びを抜けたり，場を転々とする姿が見られる。教師は，M児に対して自分の思い通りにならないと遊びを止めてしまうのではなく，じっくりと遊び，友達とかかわってほしいと願い，指導を考えていった。

M児を中心とした幼児の姿や教師のかかわり	M児の気持ちの流れ	教師の思い
①M児は友達とドッヂボールをしている。同じチームのＳ児の足にボールが当たると「足に当てるのなし。小学校のやり方だとそうだよ。」と言う。見ていたK児は「幼稚園のルールはちがうよ。」と言うと周りの幼児も「足に当たったらアウトだよ。」と言う。教師はその場を見守る。M児はK児たちに言われ，ドッヂボールを続ける。	○同じチームのＳ児に当たり自分のチームが負けるのはいやだ。 ○友達にもはっきりと言われ，無理は通らないなあ。	○K児や周りの幼児が自分の思いを出している姿から，都合のよいようにルールを変えていることをM児に気付かせたい。
②M児とＳ児がボールを取り合う。周りの幼児は「Ｓ児のボールだ！」と言うがM児は強引に取る。Ｓ児は怒り「やめた。」と言って出て行き，しょんぼりしている。M児もやめる。K児たちがＳ児の気持ちを伝えるがM児は話を聞かない。教師は，Ｓ児をM児の所へ連れていく。	○ボールを自分のものにしたいが思うようにいかないしもう，ぼくもやめてしまおう。	○困ったことがあるとすぐにその場から逃げてしまうのではなく，M児に考える機会をもってほしい。
③M児とＳ児は向き合い，黙っている。教師はM児に「Ｓ児君，遊戯室で悲しい顔してたよ。みんなもずるいって怒ってたよ。」と言うと真剣な顔で聞く。「二人で仲直りできたら教えてね。」と言い離れて見守る。	○Ｓ児君やみんなは怒っているんだな。	○M児に考える場を与え自分達で解決する方向へ向けさせたい。
④M児はＳ児にラーメンカップを見せたり「だるまさんがころんだ。」と言ったりす	○Ｓ児君は，怒っているけど許してく	○M児なりの方法で解決しようと試み

る。M児は「ごめんね，ごめんね。」とS児の顔をのぞきこみ謝る。S児が場を変えるたびM児は後を追っていく。	れるかなあ。	ている姿を認め見守っていこう。
⑤S児は，にやっと笑うがすぐにうしろを向く。教師は二人をドッヂボールに誘うとM児は，ほっとした顔になる。S児は入ろうとしない。今度は「一緒に応援しようか。」と誘うとS児はポンポンを持ち「フレーフレー赤組！」と大声で応援する。「S児君，赤組の応援するんだって。」と言う教師の声を聞きM児は，にっこり笑う。	○S児君は許してくれないなあ。 ○ぼくのいるチームをS児君は応援してくれる。嬉しいなあ。	○仲直りのきっかけがつかめないので遊びに誘い気分転換ができるようにさせたい。 ○S児の行動を伝え頑張ったM児の気持ちを認めたい。

＜考　察＞

○周りの幼児から意見を出させ，ぶつかり合う中で都合のよいようにルールを変えようとしていることをM児に気付かせていくことが大切である。

○ドッヂボールのようなルールのある遊びは自分の思いや考えを出しやすい場面になるのでよい機会として取り上げていく。

○M児が困ったことがあってもその場から逃げずに友達にかかわっていくには，互いに気持ちを出し合える場を与え，解決の場面を二人にまかせるなど，M児自身が考える機会をもつようにすることが大切である。

○S児から言葉では許してもらえなかったM児にS児の行動（M児がいる赤組を応援している姿）を知らせ，仲直りしようと頑張ったM児の気持ちを認めていくことが大切である。

(4)　指導の在り方

つまずきは，幼児にとって自分の思いや欲求を相手に分かってもらえず不快感情を抱くといったマイナス経験だけでなく，相手の気持ちを読み取り，こだわりの気持ちの切り替えを学ぶ経験となっている。つまずきを，自分の力や教師や友達の刺激や援助によって乗り越える経験の積み重ねが発達を促し，人間関係も深めていく。つまずきを乗り越えながら変容していくための手立てとして，①あきらかに幼児自身がつまずきを意識している場合と，②幼児自身は意識していないが，教師がつまずきであるととらえる場合に分けて援助の在り方を考えた。

ア．幼児がつまずきを意識している場合の援助の在り方

○教師との信頼感を基盤にして，幼児の特性，発達，状況に応じて，直接手を添えてできるよう援助したり，環境を整え，他児の行動に気付かせていく。

○自分で気持ちの表出がうまくできない時，教師は気持ちを代弁したり，仲立ちをしたりしながら，友達に受け入れられる快さや楽しさを知らせていく。

○安易に解決策だけを知らせるのでなく，幼児の気持ちを見極め，共感することにより，幼児の気持ちをうまく立て直しできるよう援助し，時には見守ったりしていく。

○友達と遊ぶきっかけを作り，友達の存在を意識させ，遊びの楽しさを知らせたりしていく。またイメージやルールを中心とする遊びでは，その過程において自分の思いや考えを相手に伝え，相手の考えに気付き受け入れるようにしていく。

○幼児同士，互いに励まし合ったり，友達のよさや成長の姿が認め合えるような学級集団を育てていく。

イ．教師がつまずきであるととらえる場合の援助の在り方

○友達関係において，友達の存在を知らせたり，具体的な遊びやルールを示したり，場や物の提示等から，幼児に快感情を多く体験させ，快感情を積み重ねていくことにより，違う行動のパターンのあることを知らせていく。

○幼児の興味や欲求を生かしたうえで，発達に必要なつまずきを乗り越えられるように，幼児期の発達の特性を生かした指導を心がけ，それをどのように伝えていくか工夫していく。

○幼児にとっては，小さなつまずきでも，気付かずにいると大きなつまずきとなり，乗り越えるのに困難をともなう場合もあるので，教師は常に幼児に対する深い理解を養う目をもつと共に，自分自身の保育を振り返ることが大切である。

Ⅳ まとめと今後の課題

幼児にとってのつまずきの意味や幼児のつまずきを教師がどのように受け止めているかについて研究を進めてきたが，教師自身の感じ方や価値観により，幼児の行動の見方が大きく異なることが分かった。

教師は常に多面的な見方，考え方をしながら，一人一人の幼児理解を深め，幼児がつまずきを乗り越えようとしている姿や援助を求めているサインを見逃がさないように努力しなければならないと考える。アンケート調査，ビデオを使っての面接調査などの調査研究を試み，その傾向や広い視野に立った援助の在り方を探りたかったが，その結果の生かし方や工夫が足りなかったと思われる。今後は，調査研究での結果や実践を踏まえ，さらに「主体的に生活していくための指導の在り方」についての研究を深めていきたい。